

復興庁総合フォーラム

東日本大震災からの復興の現状と取組

日時 2015年3月15日（日）13：30～15：30

場所 東北大学 川内萩ホール

被災地で活動する方々の声

武内敏英氏（福島県双葉郡教育長会会長）：

ただいまご紹介いただきました武内でございます。よろしくお願いいたします。

さて、私たち双葉郡教育長会では、双葉郡の子どもと大人が、一緒に教育復興について考え、対話する場として、2013年から9回にわたり、子供未来会議を開催してまいりました。

子供未来会議の「未来」には、夢、希望、笑顔といった思いを込めております。

会議は、堅苦しくなく、自由な雰囲気になるように、ワールドカフィー方式を採用いたしました。小学生から高校生までの子どもたちと、保護者、教師、教育長が、グループごとにテーブルを囲み、理想の教育や理想の学校などをテーマに、話し合ってきております。

子どもたちは、目をきらきらさせながら、多くの提案をしてくれています。

私たちは、提案された中で、実現可能なものから、教育の場に活かしてきております。教科書中心の授業より、体験を通して学びたいという子どもたちからの、動く授業の提案は、すぐに双葉郡の小中学校での授業で、その強化を図ってきております。

また、来月開校する双葉未来学園高校の教育課程や校名にも、子どもたちの熱い思いが込められております。

子どもと大人が一体となって話し合える、この素晴らしい会議を、今後とも続けていこうと、私たちは話し合っております。

木村元哉氏（福島大学行政政策学類1年）：

皆さん、こんにちは。広野町出身の木村元哉です。現在は福島大学に通っている学生です。

まず初めに、双葉郡子供未来会議と申しますのは、先ほどプレゼンしていただきました武内教育長さんがつくりました、双葉郡教育復興ビジョンの中心の1つであります中高一貫校、双葉未来学園について、その双葉郡の教育について話し合われた場所になります。

この子供未来会議では、小学生から中学生、高校生、そしてふだん見ることのない文部科学省の方や、教育委員の方など、さまざまな立場の人が同じテーブルに座り、このような近い距離で話を進めてきました。

こんな会議の中の話として、参加した子どもからは、「夢を見つける小さな窓」といった話が出てきました。これは、震災後、その子が、1つのきっかけを機に、留学をし、海外で

いろんな経験を積みまして、国際的な仕事をしたい、そういったふうに夢を持つことになりました。そして、そんな夢や希望を、もっともっと多くの双葉郡の子どもたちに経験してほしい、そんな思いから、「小さな窓」という言葉が生まれました。

ほかには、今ここに書いてありますね、「もし学校に温泉があったら、おじいちゃんやおばあちゃんが集まってきて、『孤独』というのがなくなるんじゃないの」と言った子どももいましたし、ぼくなんかは、小学校、中学校と経験して、その当時は高校生でしたので、もっとこんな授業を学びたかったな、もっとこういう授業スタイルにしたらよかったんじゃないの、というような意見を率直に言うことができました。

そうして小学生から大人までが、さまざまな人たちが、伝統や文化を大切にしながら、新しい地域を創造していくために話し合ってきました。

そして私たちは、ここで考えたことを、大人が「子どもの意見を聞いたよ、はい、聞きました」というだけのアピールであり、パフォーマンスだけに終わらせてほしくなかったんです。本当に実現してほしかったんです。

また、自分たちもこの会議に参加することができて、何かふるさとのためにできるんじゃないかなということ、強く思うようになりました。

すると、ここでもびっくりするようなことが起きました。

まず最初にびっくりしたのは、そうですね、期待を裏切られたのが、さっきも言いましたけど、あんなに近い距離で話すことができたのが1点と、2点目に、もうこの距離で話すだけじゃなくて、ぼくたちが言った意見を、否定的に捉えずに、「あ、その意見面白いね。じゃ、実現するためにはどうしていったらいいんだろう」って、一緒に考えていってくれたこと。これは、ぼくたちの期待を裏切るような行為でした。いい意味で。

そして、今言ってる、びっくりすること、それは、私たちが考えていた「小さな窓」、そして動く授業、地域も、もっと元気にしたい、といった考え方に結びついた構造として、「ふるさと創造学」という言葉が挙がってきたんです。私は、「大人って、意外とやってくれるな」なんてふうに思いました。

今、双葉郡の小中学生は、ふるさを学び、ふるさとの未来を考えて、そして自らの将来を見つけていくために、「ふるさと創造学」を勉強しています。

先ほどお話しました動く授業では、政治家の小泉進次郎さんとともに、地域のイベントである「双葉ワールド」で実際に行い、「ふるさと創造学」を、双葉郡の小中学生と一緒に学びました。未来会議のように、全員参加型で、1人1人の意見をしっかり聞いて、そしてそれを尊重し、そして一緒に考える。なので、普通の授業よりは、ちょっと忙しいかもしれませんが、だれ一人寝る子はいませんでした。それがまた、ちょっとびっくりしたことですね。

そして、あのときは自分も、もう少し生まれるのが遅かったらなあ、なんていうふうに思っていました。

また、子どもたちが伝統芸能を演じているのを見て、伝統から未来を感じることができ

ました。

このように、教育が地域のイベントに参加してくれることで、地域も元気になるし、イベントも、もっと面白くなっていくんじゃないか、そんなふうに思って、これからの双葉郡を、先に見ているような感じになりました。

それぞれ子どもたちが、この未来会議に参加して、思ったことがあります。双葉郡にある、双葉郡に興味のある子どもたちが集まる場所であり、双葉郡のことを改めて考える場所でした。これから生まれてくる子どもたちや、今、双葉郡で学んでいる子どもたち、そんな子どもたちに、双葉郡は危ない場所、というイメージではなくて、こんなにいいところなんだよ、そういうことを伝えたい、という思いから、教師を志す高校生もいますし、子どもやおじいちゃん、おばあちゃんたちの笑顔がもっと見たい、だから看護師になろう、そう志す高校生もいます。

この会議に参加することは、双葉郡がないものにならないように、また、こんなにも双葉郡のことを、多くの人が考えてくださっている、そんなことを気づかせてくれる場になりました。

私は、この双葉郡子供未来会議に参加することができ、学校という切り口、そして地域という切り口、そして伝統文化など、さまざまな切り口から地域をつくり上げていくことが重要なんだということを知りましたし、現実、実現のために、共に立ち上がってくれる大人の方々を見て、勇気をいただきました。

この4月から開校する双葉未来学園は、大人の人たちが実現してくれる1つの形になります。ぼくも含めて、この未来会議に参加した子どもたちは、これからもこの学校に関わっていきたいと思います。

そして最後に、決して大人だけが勇気や希望をこの復興に与えられるわけではありません。この会議に参加して私は、それぞれの世代が、自分とは違った世代に、そしてお互いに、勇気や希望を与えることができるということを知りましたし、確信しました。双葉郡でしかできないことを学び、双葉郡の全ての世代が、光になってくれること、そんなことを望んでいます。

今後とも、福島の大葉郡の子どもたちのために、ご指導、ご鞭撻いただければ幸いです。最後までご清聴ありがとうございました。（了）